

# 池 贊

前

シテ 旅人

ワキヅレ 宿主

ワキ 神主

トモ 神主従者

ツレ（母） 旅人の妻

子方（姫） 旅人の娘

後

シテ 日の御子の神

季は 地は  
雜 駿河

「立つ旅衣はるぐと。く。東の奥に急がん。

詞 「かやうに候ふ者は。都方に住居仕る者にて候。さ

ても某如何なる宿縁にや。次第々々におとろへ。

都に住居も叶ひ難く候ふ間。東の方に知る人の候ふを頼み。妻子を伴ひ只今東の奥へと急ぎ候。

「都をば。鳥が鳴く音に立ち出でゝ。く。東の旅に今日こそは。逢坂の関路ふく。嵐の風は松本

や。矢橋の渡り程もなく。近江路過ぎてゆく旅の。

憂き身の終り如何ならん。く。唐衣きつゝ馴れしと詠じけん。三河に渡す八橋の。くもでに物を思へとや。猶行末も遠江。果なき旅を駿河なる。吉原の宿に着きにけり。く。

「旅の者にて候ふ宿を御借し候へ。

「宿と仰せ候ふか此方へ御入り候へ。如何に申し候。

旅人は何処より御下り候ふぞ。

「是は都より人を頼みて東へ下り候。

宿主

「あら痛はしや候。又ひそかに申すべき事の候。今

夜此宿に御泊り候ふ人は。明日富士の御池の贊の御鬪に。御出でなくては叶はぬ事にて候ふ間。

御痛はしく存じかやうに申し候。夜の内に此宿を御通り候へ。是は我等が内証にて申し候ふぞ。疾う

く御立ち候へ。

シテ「あら嬉しや候。さらば急いで罷り立ち候ふべし。

ワキ「如何に誰か有る。

トモ「御前に候。

ワキ「今夜此宿に旅人が三人とまりて候ふが。夜の内に立ちたるよし申し候。急いで留め候へ。

トモ「畏つて候。如何にあれなる旅人御留り候へ。  
シテ「此方の事にて候ふか。

トモ「中々の事。

シテ「何とて御留め候ふやらん。其謂が承り度く候。

トモ「げにく御存じなきは御理にて候。当所に於て毎

年富士の御池贊の御神事御座候。即ち今日に相当  
りて候ふ間。御神事に御逢ひ候へ。

シテ  
「委細承り候。譬へば其所の神事などをば。其郷に  
孕まれ。又は其生れ氏人などこそ御神事に逢ふこ  
とにて候へ。行方も知らぬ旅人が在所に泊りたれ  
ばとて。御神事に逢ふべき事更に心得がたう候。

トモ  
「いやく 如何に仰せ候ふとも叶ひ候ふまじ。

ワキ  
「なふく 暫く。 げにも其子細を御存じ候ふまじ。

よくく 御聞き候へ。昔よりこの吉原の宿に。今  
夜とまりたる旅人は。何れもく 今日の池贊の御  
神事に御逢ひ候ふぞとよ。急いで御帰りあつて。  
そと御神事に御逢ひ候ひて。めでたうやがて御帰  
り候へ。

シテ  
「委細承り候。以前も申し候ふ如く。其所の神事な  
どゝ申す事は。其生れが郷内の人などこそ執り行  
ふべけれ。何くともなき旅の者の。此池贊の御神

事に逢ふべき事。心得がたく候。

ワキ 「さてこそ大法とは申し候へ。

シテ 「げにく尤にて御座候へども。平に公の私を以て。

ワキ 「我等が事をば御免あらうするにて候。

シテ 「さては昔よりの大法を。貴方一人して御破り候ふな。

シテ 「暫く。其儀にてはなく候。此上にて候ふ程に。恥かしながら真直に語り申し候ふべし。是は都の者にて候ふが。如何なる宿縁にや某が代となつて。事の外けいくわい仕り。世路をも嘗みがたく候ふ程に。東の方に知る人の候ふを頼み。妻子伴ひ下る体にて候へば。平に通して賜はり候へ。

ワキ 「げにく歎き給ふは理りなれども。昔より今に至るまで。親を取られ子を取られ。妻や夫の別れをする者其数を知らず。よしく前世の事と思召し。御池へ出でさせ給へとて。

カール  
「神主宮人すゝむれば。

母姫二人  
「いかゞはせんと母や姫は。父の袂にすがりつけば。

シテ  
「父もいひやる方もなく。只茫然とあきれ居たり。

ワキ  
「かく休らひて叶ふまじと。三人が中を押し分けて。

トモ  
「先に追つ立て行く有様。

ワキ  
「物によくよく譬ふれば。

地  
「中有黄泉の罪人の。呵責のせめもかくやらんと。

思ひ白露の。消ゆるばかりの心かな。是かや屠所

に趣ける。羊の歩み程もなく。涙と共に行く程に。  
富士の御池に着きにけり。く。

ワキカル  
「さて富士の御池に着きしかば。神主を始め禰宜や  
乙女。神樂をのこに至るまで。御池のあたり座列  
せり。

地  
「贊の御鬪は一つなれども。もし我にてや有るべき

と。思ふ人数は数百人。

ワキ  
「胸をいだき手を握り。

地「色を失ひ。

ワキ「肝を消す。

地「たが身の上と白雪の。深くぞ頼む氏の神。守らせ給へと手を合せ。祈誓申しけり。

ワキ詞「神主やがて立ち上り。く。御鬪の箱の蓋をあけ。諸人に取らせ数を見る。

地「数の人々残りなく。御鬪を取りて立ち帰り。披きて見れば一の鬪。なきは喜ぶその中に。因果非運は是かとよ。旅人の娘取り当り。臥しまろびてぞ泣き居たる。く。

ワキ詞「旅人は三人有るか。鬪は二つ出でゝ有るぞ。あの旅人の中に。今一つの鬪を出だせと申し候へ。

トモ「畏つて候。如何に旅人へ申し候。三人御座候が鬪は二つ出でゝ候。今一つの鬪を御出だしあれと神主殿より仰せられ候。

シテ「いや早悉く参らせて候。

「いや幼い人の鬪が出で申さぬげに候。さればこそ  
是に候。や。しかも一の鬪にて候ふよ。」

「げになふ是は一の鬪にて候ひけるぞや。悲しやな都  
の内を迷ひ出でゝ。知らぬ東に下る事も。御身を  
人にもや成すと思ひてこそ。物憂き旅にも思ひ立  
ちたれ。さて御身に離れては。母は何となるべき  
ぞや。あら浅ましや候。」

「なふさのみな御嘆き候ひそ。此鬪を母や父御の取  
り給はゞ。みづからは何となるべき。さりながら  
只今別れ参らすべき。御名残こそ惜しう候へ。」

シテ  
「げにくけなげなる事を申し候ふ物かな。二人の  
親何れにても取り当りたらば。姫は何となるべき  
と。孝行なる事を申し候。なふくく此貴賤群集の  
中にて。さのみな御嘆き候ひそ。同じ親にて候へ  
ば。何れも嘆きは劣るまじく候へども。始めより  
此御鬪に参るよりして。三人が中に一人取り当ら

うずると覚悟仕りて候ふ程に。某はちつとも嘆く  
まじく候ふよ。

母「わらはも左様には思ひ候へども。是は余りの事な  
れば。現とも更に思はれず。

シテ「父も弱げを見えじとて。心づよくは言ひながら。

さすが親子の中なれば。忍ぶ涙はせきあへず。

母「こはそも夢か現かと。姫に取りつき悲しめば。

シテ「父諸共にすがりつき。

シテ母「さても親子の契りとは只今ばかりの対面なれば。

父母をもよく見よ。姫をもいま。限りと見ればか

きくれて。いとゞ涙の増鏡。

地「富士の煙の上もなき。思ひや我に知らるらん。げ

に別れこそ悲しけれ。

上歌「歎きには。如何なる花の咲くやらん。く。身と

なりてこそ思ひ知らるれと。詠ぜし人の心も。今

身の上とあはれなる。貴賤群集はこれを見て。げ

に理りや父母の。思ひはさこそと夕露の。袖を  
しをりて諸共に。嘆きあひたる氣色かな。く。

(中入)

ワキカル  
「既に其期になりしかば。神主宮人残りなく。御池  
のあたりに並み居たり。

地  
「さてかの船には御幣をかざり。五重の荒菰その上  
に。贊の乙女をすゑ置きたり。

ワキ  
「神主御幣おつとつて。既に祝詞を申しけり。謹上

再拝。敬つて白す大日本国。駿州富士の郡下方の  
郷。大蛇の御池にして。贊の乙女を供へ奉る処な  
り。仰ぎ願はくは。青蓮の御眼あざやかに。棹鹿  
の八つの御耳を振り立てゝ。聞き入れ納受垂れ給  
へ。

地  
「や本地観王如来。寂光の都を出でゝ。

ワキ  
「かりに垂跡とあらはれ。一業所感の迷ひの衆生を。  
救はん方便の殺生。

地  
「有難けれども願はくは。池贊をとゞめて國土の人  
民の。憂ひを助けてたび給へ。

地  
「あれく見よや御池の面。く。さゞ波立てゝ水  
うづまき。風吹きあれて朱の赭舟。おのれと沖に  
ゆられ行けば。父母あれはと舟を慕へば。姫も互  
に名残を惜しみ。招けば招く風情はさながら。松  
浦佐用姫かくやらんと。汀にひれ臥し泣き居た  
り。

後ジテ  
「抑是は。富士權現の御使。日の御子の神なり。さ  
ても此たび贊の御鬪を。旅人の娘取り当り。父母  
あまりの嘆きにや。大願さまぐあり。今よりし  
ては池贊をとゞめ。国土安全になすべしと。

シテ  
「譬へば其むかし。出雲の國や簸の川上に。大蛇の  
まつて。白浪は平波となつて。池水の面悠々たり。  
池贊あつて。稻田姫を取らんとせしに。素盞鳴の

尊は居まして。剣を抜いて忽に。毒蛇の八つの頭  
を。皆いちくに打ち落して。それより池贊とゞ  
まりけり。其如くに此悪蛇をも。富士権現の御罰  
に依つて。今より池贊とゞまるべしと。告げ知ら  
しめて此舟を。もとの汀に漕ぎよせて。姫を二親  
に与へつゝ。さて日のみこは白雲に。かかやき昇  
るや富士の嶽。雪や煙に立ちまぎれ。雪や煙に立  
ちまぎれ内院に。神はあがらせ給ひけり。